

兵庫県立伊川谷高等学校 改善プラン

— 学ぶ意欲と伸びしろを高める「伊川谷メソッド」の構築 —

教育実践高度化専攻

学校経営コース

P110101

西岡 光信

はじめに

志水宏吉の提唱する学校の改善モデルとして「スクールバスモデル」がある。この理論を元実践化を試みようと考えた。その具体的方策が「伊川谷メソッド」である。

第1章 伊川谷高校の現状と課題

第1節 学校の概要及び地域の特性

兵庫県立伊川谷高等学校は、神戸市の第3学区にある中規模の全日制普通科高校である。地域の特性として、西神地区を中心に家庭の進学意識が高く、中学生の入試学力レベルは県下でも高い。本校は第3学区の大学進学を考へて公立普通科高校を希望者する中学生の受け皿的な位置づけとなっている。

第2節 生徒の現状と課題

教員の指示には素直に対応し、真面目でおとなしい生徒が多い。一方学習面では、学習習慣がなく、学習意欲も低い生徒が多い。そのため、主体的な学びや、積極的に自己の目標に向かって努力する力も弱い。課題として、①自己有用感を涵養させること、②主体的に学び続ける力の育成、の2点が重要である。

第3節 教員及び学校組織の現状と課題

問題行動に対する生徒指導面での協働態勢はできているが、学習指導や授業改善への共通理解、自主性育成への働きかけが不十分である。まず、①育成すべき生徒像の共有化を図ること、②学習指導や授業の共通理解を深めること、③矯正的・消極的な生徒指導から自主性育成指導への転換を図ること、④ボトムアップシステムの確立、が挙げられる。

第2章 伸びしろを高める「伊川谷メソッド」

第1節 概要

中学校段階まで十分な力をつけることができなかつた生徒の学習意欲と伸びしろを高める総合的な方策が「伊川谷メソッド」である。教職員が育てるべき生徒像、養成すべき学力を共通理解し、組織的・協働的に行う教育活動の総体を「伊川谷メソッド」として構築することが本稿の学校改善プランである。

第2節 期待される効果

教員にとっては、①学校独自の方策による協働化を促し、②分散化・個別化していた教育活動の凝集性が高まり、③ベクトル合わせができ、④相互に知識や指導技術を高める職能成長につながること、などが期待できる。

第3節 教員の特性、学校組織文化の特性による課題

教員の協働化を図る上で、教員の特性及び学校組織の特性への配慮を欠いた学校改革は失敗の可能性が高い。教員の心的・行動的特性、組織文化、組織特性と、学校の置かれている現実を理解し、教員の意識や組織文化の漸次的な改革を図ることが大切である。

第3章 学校改善の具体的方策（「伊川谷メソッド」）

第1節 学力向上の方策

第1は自己有用感を高め、学びの意味の理解を促す初期指導である。入学時の生徒の学力と大学受験学力養成を前提にした普通科高校の学習内容との不調和を克服するために入学後の約2ヶ月間、学びの意味を理解させる特別学習指

導(初期指導)を行う。第2に英数国の基礎学習定着システムの構築である。①週末課題の継続と一層の組織化を図る、②様々な「校内補習塾」の実施、③夏期補習の1年生午前中原則全員参加を提案する。第3に教科・学年・家庭との連携による家庭学習習慣の確立である。①授業時間割を軸にした家庭での学習計画表作成、②定期考査対策の学習計画表の作成、③保護者への連絡と確認依頼、などである。

第2節 主体的な学びを促進させる授業改善

第1に授業改善に向けた基本了解事項の確認をする。授業の中心は生徒であること、生徒の学習意欲・授業態度は教員の授業展開に起因すること、などである。第2に生徒の授業に対する自覚を促し、学校全体として授業改善に取り組む姿勢を示す「授業ルール」を設定する。第3に「伊川谷基本授業スタイル」を設定する。教え込み・知識伝達型の一斉授業からの転換を図り、全教員で主体的な学びを促す授業改善のために、ベースになる授業展開を設定する。

第3節 自主性を高める方策

学力向上策と並行して、生徒指導面での自主性・自律性育成の取り組みを行う。第1にHR活動、学校行事の改善である。担任の一日の業務の確認と共通理解を図り、集団作りのクラス運営を行う。学校行事では、自主性育成のための働きかけを段階的に導入する。第2に部活動の活性化を図ることである。そのために部活動顧問会議での指導方針や成果等の意見交流、入部促進の全校的な取り組みについて提案する。第3は自己管理能力の育成―「能率手帳」の活用―である。自主性を促すためには自己管理能力が必要である。手帳による育成策を提案する。

第4章 「伊川谷メソッド」構築のための組織活性化(協働化)

第1節 知識経営の視点による校内研修

教員の授業実践の場では、形式知と暗黙知が埋め込まれている。これは授業だけでなく様々

な教育活動の局面における教員と生徒との関わりの中に見え隠れする。授業研究や研修会において、教員に蓄積されたそれらの暗黙知と形式知に気づき、共有し、その後の教育活動の中で実践していく。そして授業研究や研修会で得られた知見を共有財産として蓄積し、学校全体の教育力を高めていく「知識経営」の視点による校内研修の活性化を図る。

第2節 「伊川谷メソッド」構築に向けた学校評価の改善

「伊川谷メソッド」構築を促すために、学校評価の改善を図る。評価項目では、①「伊川谷メソッド」に関する項目を設ける、②授業改善など各教員の課題の項目を設ける、などが必要である。また、実施上の課題として、①評価項目、実践目標全体の見直しを図る、②夏休み期間に中間評価を行う、③「保護者・生徒アンケート」の実施を提案する。学校評価の中に具体的に「伊川谷メソッド」の項目を落とし込み、実施状況とその成果を検証する。

第3節 更なる発展に向けた分掌組織の方向性

現行分掌組織による「伊川谷メソッド」の企画担当案を示すが、今後「伊川谷メソッド」を確立し発展させるには、分掌組織の改編が必要である。その方向性として、①職務構造を簡素化し、仕事の平準化を図る、②各部・学年を二段階の階層化を図る、③経営戦略を検討する組織の新設、の3点に基づく分掌組織を検討した。

おわりに

「スクールバスモデル」を基底に実践化を試みたが、伊川谷の「バス」はボディの前半部ができつつある状況に終わっている。今後、左手に解説書(理論)と右手に工具(実践)を持ち、同僚の協力を得て作り上げていきたい。

修学指導教員 堀内 孜
指導教員 堀内 孜